

## 降誕節第7主日 説教 「世界は我が教区」 要旨

牧師 黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会 2023年2月5日

マタイによる福音書 14:13-21

藤沢教会がこの地に誕生し、105周年を迎えました。そして、これは当然のことではありますが、創建当時のことを記憶に留めている方はこの場には一人もおられません。しかし、私たちが経験した105年前の出来事は、今日を生きる私たちにとっては、決して遠い日の出来事ではありません。当時のことは今のことであり、それを私たちに教えてくれているものがこの日の礼拝です。なぜなら、当時も今も、私たちはほぼ同じ形で神様を礼拝しているからです。しかし、だから、その礼拝スタイルがずっと変わらずにいつまでもということではありません。ただ、無理に変わらなければならないものでもありません。変わるには変わるだけの必然性が必要であり、そこで私たちが変えられていくのは、どんなに様々なことが変わったとしても、そこに私たちが決して見失ってはならないものがあるからです。

その一つが伝統です。伝統とはつまり、大切にしているもの、大切にしてきたものを大切なまま受け継いでいくということです。聖書も聖餐式も、長く大切に受け継がれてきたのはそのためです。そして、教会がそれを大事に大事に受け継いできたのは、これは当然のことではありますが、それらのものが私たちの信仰にとって欠かすことのできないものだからです。けれども、大事にしていれば、それですべてが事足りるということでもありません。そこでもう一つ大事なことは歴史です。つまり、それらのものを大切にしてきた私たちの歩みがどのようなものであったのかということです。それは、古いものが残るべくして残っているのは、それが良いものでもあるからです。

そこで、数年前のクリスマスにあったことを思い出しますが、カトリック藤沢教会のガールスカウトの子どもたちが私たち藤沢教会を訪ねてくれたことがありました。その時、教会を案内しながらその子たちに私が言ったことは藤沢教会百年の歴史についてであります。すると、私の話を聞いて、その子たちが声をそろえ言ったことは、「すごーい」というこの一言でありました。ちなみに、この「すごーい」とい

う叫び声は100年という時間の長さだけに向けられたものではありません。彼女たちが声をそろえて「すごーい」と言ったのは、歴史というものが、同じ「時間」を長く共有する人たちのものだと、そう直感的に理解したからだと思うのです。ですから、自分たちとは違う、「すごーい」という彼女たちの一言は、そういう意味で私たち藤沢教会に向けられた尊敬の念であったように思います。では、彼女たちが私たちに抱いた尊敬の念とはいかなるものであるのか。恐らくは、それが何かははっきりと分かっていたわけではないと思います。けれども、何かが違うと思った、それは、自分たちの根っ子に置かれたものと重ね合わせながらのことだったと思います。そして、それは、彼女らにとってのカトリックの伝統と歴史です。では、私たちにとってそれは何か、私たちの教会の土台、その根っ子にあるものとはつまり、メソジスト教会の伝統であり、歴史ということです。

ただ、日本キリスト教団の教会として歩む私たちが、普段このことを意識することはほとんどないように思います。ですから、いきなりメソジストの伝統などと言われてもピンと来ない方もいることでしょう。しかし、藤沢教会に参りまして間もなく丸七年が過ぎようとしておりますが、藤沢教会が様々な伝統に立つ教会出身の方が多くにもかかわらず、やはり藤沢教会はメソジストの伝統に立つ教会だと思っております。その一つが、牧師というものを皆さんが大切に思っていて下さっているということでもあります。ですから、今日の説教題を「世界は我が教区」としたのはそのためです。ところで、この言葉が誰の言葉か、皆さんはご存知でしょうか。この「世界は我が教区」と語ったのは、メソジスト運動、メソジスト教会の父祖である、ジョン・ウエスレーであります。ちなみに、ある人曰く、この一言によって言い表されるものがメソジスト教会というものなのだそうです。それは、伝道、宣教ということに関しては、当時のいかなる教会よりも熱心であったからです。ですから、アメリカの開拓時代、大雨が降っている時などに家の外に人の気配を感じると、当時の人々は「メソ

ジストの牧師か」と蔑むような冗談を言ったそうです。

そこで、ジョン・ウェスレーについてご存じない方もいらっしゃると思いますので、青山学院のホームページから拝借した一文をお読みしますと、そこにはこう記されておりました。「ジョン・ウェスレーはオックスフォード大学で神学を学び、イギリス国教会の司祭となり、後にプロテスタント教会のなかで一つの大きな流れとなるメソジスト教会の源流となった人物です。大学時代には「ホーリー・クラブ」という学生が主体となった自覚的なグループの指導者となり、何事も「メソッド」(方法)に基づいて行動するという意味で「メソジスト」と呼ばれるようになりました。ウェスレーは福音宣教に熱心であり、大西洋を渡りアメリカで伝道したこともありました。しかし、その試みはうまくいかず失意を抱いて帰国しますが、1738年5月24日にロンドンのアルダスゲート街でもたれていた小さな祈祷会に出席していた時に、決定的な回心を経験します。それはルターの記した「ローマの信徒への手紙の序文」が読まれていたときでした。「私は自分の心が不思議と温められるのを感じた」という言葉をウェスレーは残しています。その後、ウェスレーの伝道活動にはめざましいものがあり、教会のみならず大規模な野外集会で数多くの説教を語り、それは現在の教会の霊的な財産となっています。「世界はわが教区」とはそのようなウェスレーの精神をよく表しています。」とこう記されているのですが、ちなみに、ウェスレーの説教回数はおよそ4万回とされています。

このように、「世界は我が教区」と語ったそのままを生きるのがウェスレーであります。そこでこの言葉に加えて、もう一つ、ウェスレーの言葉として有名な言葉が「できるだけ儲けて、できるだけ貯めて、できるだけ与えなさい」というこの言葉です。それは、私たちがこうして聞いている福音は聞いて終わるだけのものではなく、実践を伴う、まさに生きてこそのものであるからです。ですから、この二つの言葉については、母教会では私も折りにつけ聞いたものです。それだけでありません。それに付随する生活上の様々なことも聞いた、というよりも、聞かされたように思います。しかも、献身してからは、神学生ということでもかなり強く、繰り返し聞かされた、それゆえ、強くいわれることには多少

の抵抗を感じないわけではありませんでした。しかし、あれほど抵抗を感じた先輩たちの言葉が今では懐かしく思い出されるのです。ただ、それは、それが同時に苦い思い出でもあるからです。なぜなら、そこで思い出されることは、私が表面的にしか物事を見ていないし、聞いていなかったということでもあるからです。しかし、それでもそれが許されていた、苦い思い出が懐かしくもあるのは、この許された経験があるからです。

そして、それが今懐かしく思い出されるのは、私が年を取ったからではありません。気づかされたのは、聖書に聞いていくならこの日の御言葉を通してのことであり、また、母教会を離れ、それぞれの任地で先輩牧師や多くの信徒の皆さんと共に過ごす時間、交わりが数多く与えられたからでもありました。ですから、私たちの信仰にとって時と場を共にする経験はとても大事なことだと思うのですが、そして、それを伝えてくれているのがこの日の御言葉でもあるのです。なぜなら、私たちが聖書のみ言葉に聞いていくということは、御言葉を信じる人たち、信仰の先達たちの、この人たちが御言葉をどのように聞き、どのように捉え生きてきたのかを知ることでもあるからです。つまり、御言葉に聞くということは、翻訳された文字情報だけを受け止めるものではないということです。その生き方、暮らし方、そのすべてを聞いていくことだと思うのです。ただ、もちろん、そのすべてを知ることには私たちには不可能なことです。しかし、だからこそ、こうして一緒にいる時間、共に恵みを分かち合う経験が私たちに求められるのであり、そして、そうした中で知らず知らずのうちに受け継いでいくのが伝統であり、歴史というものでもあるのです。

ですから、この点を踏まえ、この日のみ言葉に聞いていくなら、そこには私たちが普段から大切にしている二つのことが語られています。先ず一つが私たちが今こうして献げている礼拝です。それは、御言葉に「群衆は、方々の町から歩いて後を追った」とあるように、礼拝とは、イエス様に招かれるだけでなく、私たちにとってはイエス様の後をついていくことでもあるからです。まただから、主日から主日への歩みを繰り返しながら私たちの生涯は形作られていくことにもなるのですが、ですから、私たちの生涯はさながら巡礼のようなもの

だとも言えるのでしょうか。それゆえ、その歩みは一步一步、自分の足で歩いて行かなければならない、自分の足でイエス様の前に向かわなければならぬ、そして、私たちがイエス様の憐れみと慰めに与るのは、このように自分の足でイエス様に近づこうとするからです。ですから、礼拝とは、私たちにあっては、自分の足で稼ぐものとも言えるのでしょうか。ただだから、恵みを受けた私たちは、まさにウェスレーの先ほどの言葉にあるように、気前よく、惜しみなく、イエス様から受けた恵みを人とも分かち合うことができるのです。そういう意味で、諦めずに厳しくも厳しく私と接して下さった母教会の方々や私たち藤沢教会の先達は、今ではそのほとんどが御許に召されてしまいました。まさにメソジストの伝統に立つ、「気前のいい人たち」であったと言えるのでしょうか。

そして、もう一つ大切なことは、説教後にこの日行われる聖餐式です。五千人の供食と言われているこの箇所は、こうしてイエス様の御前に集まった人々が神の国の宴に招かれていることを物語るものでもあります。ですから、イエス様がここで天を仰いで讃美の祈りを祈り、この命の糧を弟子たちに手渡されたことから分かるように、聖餐がいかに私たちにあって大切なものなのかということです。そして、ここにまた私たちの交わりの姿を見る思いがするのですが、それは、この分かち合う光景こそが終わりの日を迎えた私たちの姿でもあるからです。ですから、その姿を取り繕うことは誰にもできません。なぜなら、終わりの日とは、私たちの生き方、暮らし方、私たちがこうして生きていることのそのまますべてが、隠しようもない形で、しかも、隠していたものまでがすべて、一瞬のうちには露わにされる時でもあるからです。ですから、聖餐はそういう意味で、隠そう隠そうとしていることも、私たちが気づかずにいることも、神様とイエス様がすべてご存知の上で備えられる出来事であるということです。

では、御言葉はその私たちにあってここで何と語っているのか、この恵みに与った人々すべてが食べて満腹したと語るのです。その数、女性と子供を別として、男性が五千であったというのですが、それだけではありません。さらに、語るころは、「残ったパンの屑を集めると、十二の籠いっぱいになった」というのです。この

ことはつまり、イエス様の食卓にはいくらでも余裕があったということです。ですから、分かち合うということについて、私たちは躊躇う必要はなく、それゆえ、人数が多すぎるなどと言いつくすることもできません。従って、ここで語られていることは、数字上のことだけを示すものではありません。それが、こうして礼拝に招かれ、聖餐を分かち合う私たちの普段のあり方であるということです。そして、そこに現されるものが私たち信仰でもあります。ですから、信仰とはつまり、言葉の上だけのものでもなく、具体的なものを互いに分かち合っていてこそのものであるということです。しかも、分かち合いが単に物のやり取りだけでは終わらないように、互いが互いに理解し合うことであり、なぜなら、そうでなければ、分かち合いによってすべての人が身も心も満たされることはないからです。

このように、終わりの日の先取りとして与えられているものは、身も心も満たされる相互理解ということでもあります。それゆえ、それは霊的な事柄であるとも言えるのでしょうか。しかし、この分かち合いを「霊的」という言葉の説明をもって終わらせてはなりません。それは、「すべての人が食べて満腹した」と御言葉が語るように、それは具体的なものであり、現実的なものでもあるからです。メソジスト教会が伝道の一環として、教育、医療、福祉と社会奉仕とその実践に励んだのはそのためであり、このように、御言葉を御言葉のままに生きた人々によって築かれたものがメソジストの伝統であり、歴史でもありました。従って、「霊的なもの」とは、御言葉に生きた人々に現れ出るものであり、言葉の上だけのものではないということです。そして、それは、「すべての人が食べて満腹した」というこの御言葉が示すように、現実を具体的に分かち合うところに働くものでもあるのです。

そこで先ほどお伝えしたジョン・ウェスレーの二つの言葉をもう一度思い出していただきたいのですが、一つは、今日の説教題でもある「世界は我が教区」という言葉です。そして、もう一つが「できるだけ儲けて、できるだけ貯めて、できるだけ与えなさい」というこの言葉であります。それを実践してきたのがまさに私たちの先達でもありました。ただ、現在、私たちの国を取り巻いている状況を踏まえ、この言葉に聞いていく時、皆さんの耳にこの言葉は

どのように聞こえてくるのでしょうか。先ほど、少し個人的なことを申しましたが、それは、これらの言葉を今強く言われたとしたなら、皆さんがどう受け止めるのだろうかと思うからです。そして、私が思うのは、これらのウェスレーの言葉は、言葉の上では旧統一協会をはじめ、カルトの主張するところと重なるところがあるからです。それゆえ、この言葉を耳にし、伝道と献金を強要されているとの印象を持つのではないだろうか、また、言われているその言葉に応えられない時、皆さんが負い目を負うことはないだろうか、ついそんなことを考えてしまうのです。そして、そう心配してしまうのは、強いられてすることには喜びはなく、それゆえ、満足することもないからです。ですから、この日の御言葉は、食べられればいい、食べさせればいい、それで満腹できればいい、そういうものでないのは明らかです。イエス様からの恵みを分かち合うところには、必ず喜びが湧き上がるのであり、それは、分かち合いが単に物のやり取りに終わるものではないからです。

そして、そこで大事なことは普段から私たちがそういう繋がり、交わりを築いているかということでもあります。このことはつまり、分かち合いとは業績を上げ、規模を誇るものではなく、大切なことは、時間を共にすることであり、いろいろありながらも一緒にその恵みを分かち合うものということ。ですから、物のやり取り自体が目的となることもなく、また、業績を競い合うこともありません。なぜなら、それ自体が信仰の目的となってしまうなら元の木阿弥でしかないからです。それゆえ、先ほどのウェスレーの二つの言葉は、語られている内容自体が目的となることはありません。その言葉自体が目的化したなら、そこで感じる喜びも達成感も歪んだものにならざるを得ないからです。ですから、私たちがもしウェスレーの言葉に歪んだ何かを感じたとしたなら、それは、私たちが目的と手段を取り違えているからです。では、誤解しないために何が必要なか、それは、イエス様に触れているという感覚を持ち続けることです。つまり、それは、イエス様という聖なるお方との一体性ということでもあります。なぜなら、大勢の人々が食べて満腹したのは、つまりは、心が満たされ、安らかな気持ちになったのは、イエス様という聖なるお方に触

れ、このお方を我が内に宿すことになったからです。

従って、礼拝と聖餐式において私たちに約束されているものもそうです。しかも、この私たちに今与えられている恵みは、私たちの交わりにおいては終わりの日まで失われることのないものでもあるのです。私たちが御言葉を御言葉として御言葉の語るままに生きることができるのは、それが終わりの日まで失われることがないからです。ですから、そういう意味で私たちに求められることは、仏作って魂入れず、ということではありません。イエス様も教会も、私たちが作り上げるものではなく、招かれ、進み行き、イエス様という聖なるお方との触れ合い、この交わりを通し、この世に実現しているものでもあるからです。だから、そこには喜びがあり、平安がある、そして、それを愚直に現してきたのがメソジストの歴史であり、伝統でありました。ですから、人をして何かが違うと感じさせたものは、その中心、根底にあるイエス・キリストとの一体感、キリスト体験にあると言えるのでし、まさに私たちの歴史が主にある喜び、平安を言い表す伝統に生きてきたからでもありました。

ただ、今、私たちを取り巻く環境は必ずしも私たちにとって好ましい状況にないのは確かなことです。非常に分が悪い、そのため、この状況をなんとか好転させたいとも思うのですが、そのために必要なものが、人をして何かが違うと思わせるものでもあるのでしょうか。そして、この何かが違うと人をしてそう思わせるものとは、数の多さや力の大きさを誇るものではありません。これまでと同じようにこれからも、イエス様と共に、イエス様に触れて、その恵みを分かち合い、御国へと向かう時間を喜びと平安を日々感じながら共に過ごしてゆくことです。ですから、そういう意味で、私たちは奇をてらう必要はありません。これまでも、今も私たちに許されていることをこれからも同じように大切にしていこうと、折りが良くても悪くても、私たちに求められていることはイエス様と共に歩み続けることなのです。ですから、この変わらない素朴な歩みを、私たちに与えられている大切な人たちと、これからも共に分かち合いながら歩み続ける私たちでありたいと思います。祈りましょう。